

権力篇

映画文学人生論

- 081) 東京裁判 監督：小林正樹 原作：菊田一夫
082) 小説吉田学校 監督：森谷司郎 原作：戸川猪佐武
083) 仁義なき戦い 監督：深作欣二 原作：飯干晃一
084) 実録・連合赤軍 浅間山荘への道程 監督：若松孝二
085) 金融腐蝕列島[呪縛] 監督：原田真人 原作：高杉良

権力は腐敗する、専制的権力は徹底的に腐敗する

地震雷火事親父は怖いものの代表といわれる。もつとも、地震雷火事は災害にちがいないが、親父は大山風（おおやまじ）がつまって「おやじ」となったというのが語源で、台風のことだという説もある。

子供にとって災害のような父親もいることはない。夏目金之助の父親は幼い金之助を二度も養子に出した。蒸気河岸の先生の父親は息子が小学校を卒業すると、山本周五郎商店という質屋の徒弟にした。フーテンの寅さんの父親は芸者に生ませた息子と大喧嘩し、息子が中学を中退して、家を飛び出すきっかけをつくった。

権力者がボスという意味の「おやじ」と呼ばれることもある。怖い権力者に生殺与奪の権を握られている状況では、親父は災害と変わらない。そこで、親父の権力を描いている五本の映画を選んできた。原作も入手可能なものは読んだ。

小林正樹 東京裁判

森谷司郎 小説吉田学校 戸川猪佐武

深作欣二 仁義なき戦い 飯干晃一

若松孝二 実録・連合赤軍 浅間山荘への道程

原田真人 金融腐蝕列島「呪縛」 高杉良

『東京裁判』の親父は日本人ではない。A級戦



権力篇

映画文学人生論

犯やBC級戦犯を裁いたのは外国人、しかも、ほんの少し前までは鬼畜米英と呼ばれていた外国人の親父だ。「日本人は格子なき牢獄にいるようなものだ」と吉田茂首相は嘆いたが、その吉田茂も『小説吉田学校』では国民に対してワンマン宰相として親父の権力をふるっている。

『仁義なき戦い』はヤクザの親分、『実録・連合赤軍 浅間山荘への道程』は革命闘争集団のリーダー、『金融腐蝕列島「呪縛」』は元頭取・会長の相談役と大物フィクサーが権力者として羊の群の間ではおそれられる親父的存在だ。

いずれもノンフィクション、実録、フィクションを含む実録、あるいは実録に近いフィクションを原作としている。フィクションの場合でも、一般的に政治小説、経済小説は文学的純度が低いとみなされるが、これは政治や経済につきまとう権力というテーマが生々しすぎるためだろうか。

小説と比べて、映画はフィクションの要素を誇張することによって、観客を感動させようとする手口が露骨だ。『仁義なき戦い』のラストで菅原文太が仲間の告別式で拳銃をぶっ放し、「弾はまだ残っているがよう」とヤクザの親分に向かって凄むシーンは原作にはない映画的誇張だが、親父の理不尽さに対してもややもやしている観客の鬱屈した気持を発散させてくれる。

格子なき獄吹き飛ばせおおやまじ